

第二十八回 「変わってゐるっていいと思う」／光

「セナ、僕の髪色ってさ、変じゃない？」

「変じゃないよ、どうしたの？」

「ふと、学生の頃髪色について苛められたなあ……って思いだしてさ」
「あー、でもね、晶の髪色、僕は好きだよ。そもそもさ、うちの家系的に薄紫の髪色ってだけじゃあね……」

姉貴は紺、僕は金で、妹は銀、そんな髪色をしてる家系。異母姉妹とか異父姉妹って言う訳じゃない、みんな同じ両親から生まれてる。

「晶の髪色が仮に異端とすると、僕含めた三姉妹、皆異端だよ？」

「え？どうして……あ、みんな地毛なんだっけ？」

「そうそう、僕は金髪、姉貴は紺色だし、皆気付かないけどさ、あの目、左右で色違いなんだよ？」

「え？本当？気付かなかったなー」

「妹は妹でアルビノかって位真っ赤な目に銀白色でしょ？」

「あー、普通にガンリカタの練習してた時はびっくりした」

「あれは姉貴を守るために始めたらしいねー」

ゆっくりと時間が流れる。僕らの会話、窓越しに差し込む光に反射してキラキラしている晶の髪。